# お知らせ

## 東日本大震災に被災された皆様には，心よりお見舞い申し上げます

本誌の送付先などに変更が生じております場合は，FAX や Email 等でお知らせ下さい．
FAX: 042-739-8338，Email: HSRC@agr.tamagawa.ac.jp

## 「ミツバチ科学」は年 2 回発行に

前号でもお知らせしたとおり，玉川大学ミツバチ科学研究センターの機関誌として年 4 回刊行されていた本誌「ミツバチ科学」は，28 巻からは年 2 回の刊行で継続刊行となっております．本号，第 28 巻 2 号が，したがって 28 巻の終了号となります．本年度（2011 年度）は本来，29 巻の刊行年ですので，3 月までに 29 巻 1 号を刊行し，徐々に本来の刊行タイミングに追いつけるように進めていきます．

## 寄贈先の追加に関して

養蜂現場における病害対策は今後ともその重要性を増していきます．公的機関として，ミツバチの疾病対策に協力していただいている家畜保健衛生所に，本誌を通じてミツバチ関連の情報を提供していくことも，また本号の記事のように家畜保健衛生所発の情報を読者が共有できることも有意義なことと考えます．そこで，家畜保健衛生所など関係の公的機関を本誌の寄贈先として登録を進めています．寄贈先としてご推薦いただけるところがあればお知らせ下さい．

**編集後記**　年 2 回の発行という形に移行させていただいての再刊を果たしたのに，今号の発行が遅れてしまったことを，まずもって深くお詫びしたい．ミツバチ科学研究センター（専任）の吉田教授が体調を崩されて入院加療中なのに加え，歴史的ともいえる 2 つの記事の準備に手間取ってしまった．その 2 つの記事の一つ目は，わが国でポリネーション用にマルハナバチが利用されるようになってからちょうど 20 年を迎えるにあたり，当初から一貫してこの問題（画期的な「光」の部分と，外来種が逃げ出して生態系を攪乱してしまった「陰」の部分の両面あり）に関わってきた光畑雅宏氏に，その過去，現在，そして未来についてまとめていただいたものである．もう一つは「ニホンミツバチの交尾場所発見史」．このテーマは当研究センターの吉田教授の永年のテーマであったが，同時に盛岡市を拠点とし，藤原誠太氏が会長をつとめる日本在来種みつばちの会の創設以来のテーマでもあったことから，これもちょうど 20 年間にわたり，両者が成果を競い合う形で解明が進められてきた．この記事は，両グループを代表するお二人の共著という形で，論文のみならず公表されたすべてを年表にまとめて見えるようにしたものであり，ある意味で画期的といえる．この間の経緯の詳細がわかるとともに，当編集陣としては，研究成果の公表というもののしくみについて考える一助ともなる内容にできたのではないかと思っている．

その他では，最近養蜂関係の主要学術雑誌 3 誌がそれぞれにミツバチの健康問題に関して特集を組んだことを受け，畜産草地研究所家畜育種繁殖部みつばち研究室の芳山三喜雄氏に，最近のミツバチの疾病事情についてまとめていただいた．山下奉海，田中進氏からは，近年全国的に問題となっているニホンミツバチの「蜂児出し現象」についての山口県下での報告をいただいた．表紙の写真もこの記事の中から，巣門前で幼虫を加えて飛び出そうという蜂の画像を選ばせていただいた．白藤謙一，柴崎透江氏によるソロモン諸島での養蜂普及の実践記録は，日本での販売に至るストーリー．最後のスズメバチ対策の記事は，湘南家畜保健衛生所に勤められている池田知美氏らによるもので，全国家畜保健衛生所業績発表会で報告された内容とのことであるが，こうした形の業績はなかなか一般の目に触れにくいことから，本誌に掲載させていただいたものである．ミツバチの棲息環境や健康問題が重要度を増す中，全国の家畜保健衛生所の役割は益々大きくなりつつある．今後養蜂現場との間で，それぞれの地域に即した疾病対策や疾病発生に関わる情報を提供していただける体制がさらに進むことを願うものである．　（佐々木M）